歴博をあるく

旧石器時代に生きた人々を探る

広報部会

昨年３月にリニューアルオープンした第１展示室「最終氷期に生きた人々」をテーマにした展示から日本人のルーツと生活を探ってみてはいかがですか。日本列島の旧石器時代はホモ・サピエンスが日本列島への到達とともに始まり、その年代は約３万7000年前です。その仮説を立証するためにあるグループが、昨年の７月に台湾東部から出発した５人乗りの丸木舟で約45時間かけて沖縄の与那国島に到着するこができたと報道されました。しかし、当時と現在とでは気候や地形、風習などの違いを理解する必要があると思われます。

列島に到達した最初の人々

第１展示室に入ると正面のボード（写真１）が私たちを迎えてくれます。ホモ・サピエンスが日本列島に到達し、北海道を除く本州・九州・四国の全域に拡散した。日本列島の後期旧石器時代の始まりである。彼らはどんな人々だったのかその生活を見てみよう。

列島に到達した最初の人々（写真１）

定住生活の始まり

本格的な定住生活の開始によって人々は移動以外の方法で様々な問題を解決する必要にせまられた。動植物利用技術の発達や計画的な土地利用、生活規範の整備、呪術・祭祀の発達などの社会機能化は定住生活によって促された。

旧石器時代の人々の生活

第１展示室に入って最初に出会うのは、肩の高さが約２．６ｍのナウマンゾウを中心とした「約４万年前の南関東の風景」のジオラマである。旧石器時代の人々の生活を描いた復元模型が続く。「皮なめし」「石器づくり」「動物の狩猟と解体作業」「落とし穴猟」「石蒸し調理」、どれも時間と手間をかけて作った等身大の模型である。石器の資料を並べただけでなく多くの人にその時代の生活の姿を直接的に見て、理解してもらうための展示である。石器時代人といえば上半身が裸との誤解があるが、まだ最終氷期のさなか、寒ければ寒いなりの工夫をし、服には色も付けていた可能性もある。

生活に必要な石器の製作

「石器づくり」では、石器を作っている大人と、最終段階で失敗してべそをかいている少年の姿を再現した模型がある（写真２）。実際の発掘現場では造るのに失敗した石器も数多く出土している、悔しかったろうな！そんな石器時代の人の思いや生活を模型に描いた展示が設置されている。

生体復元模型が並ぶ・手前が「石器づくり」（写真２）

実物の落とし穴

横須賀市の船久保遺跡で、列状に配置された42基の土坑（動物の落とし穴か）が見つかった。展示は、幅１ｍ、深さ1.5ｍの土坑の剥ぎ取り（薄く切取った断面）で、その上部には獲物を仕留めようとするハンターの模型が設置されている。

第1展示室は、最新の研究成果をもとに、大幅にリニューアルされました。ぜひ旧石器時代の人々の生活を想像し、探ってみては？新たな発見があるかもしれません。